




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3045 号	氏名	戸次 宗久
審査担当者	主査	吉田 茂 生	
	副主査	甲斐 久 史	
	副主査	吉田 典 子	
<p>主論文題目： Localization of myocardial FDG uptake for prognostic risk stratification in corticosteroid-naïve cardiac sarcoidosis (ステロイド未治療の心臓サルコイドーシスにおける心筋 FDG の取込み局在化による予後リスク評価)</p>			

審査結果の要旨（意見）

心臓サルコイドーシス患者において、心筋の 18F-fluorodeoxyglucose (FDG) 集積様式と長期的な生命予後予測因子探索を行った研究である。中央値 4.9 年の追跡期間中に 72 例中 42 例で FDG-PET により心筋の炎症活動性が確認され、15 例の患者に有害事象が発生した。左室収縮機能不全を調整した Cox 比例ハザードモデルでは、心筋血流異常を伴う右室または左室の前外側基部における FDG 集積が、生命予後予測因子であることが明らかになった。先行研究より長期の観察により、心筋内の集積部位を細分化して生命予後予測ができる事を示しており、学位論文にふさわしい意義深い結果である。研究内容に関する質問にも著者よりの確な返答が得られた。今後右室集積と左室前外側基部における FDG 集積の病的意義や、どちらの部位でより有害事象が多いかなどさらに長期間観察する事によりを明らかにしていただきたい。今後臨床で局所の集積を見た際、積極的に血流シンチを行い血流異常を把握するなど適切な診断と患者様の治療予後向上にもつなげて頂きたいと思う。

論文要旨

副腎皮質ステロイド未使用の心臓サルコイドーシスにおいて、心筋の 18F-fluorodeoxyglucose (FDG) 集積様式と長期的な臨床転帰との関連は明らかにされていない。

本研究では、副腎皮質ステロイド未使用の心臓サルコイドーシスにおいて生命予後に影響を与える心筋血流様式や心筋 FDG 集積様式について検討した。

臨床的に心臓サルコイドーシスが疑われ、炎症活動性評価のために FDG-PET 検査を受けた 90 名を登録した。生命予後に関する有害事象は、持続性心室頻拍、心臓移植、全死亡の複合の発生を医療記録、除細動器記録、電話によるインタビューにより確認した。

90 例中 72 症例が全身性サルコイドーシスと診断され、さらに 42 例が FDG-PET により心筋に炎症活動性が存在することが確認された。中央値 4.9 年の追跡期間中に 6 例の持続性心室頻拍を含む 15 例の心臓サルコイドーシス患者に有害事象が発生した。左室収縮機能不全を調整した Cox 比例ハザードモデルでは、心筋血流異常を伴う右室または左室の前外側基底部 FDG 集積が、生命予後に関する有害事象を予測する因子であった。

心筋血流異常を伴う右室または左室の前外側基部における FDG 集積は、副腎皮質ステロイド未使用の心臓サルコイドーシス患者における長期的な生命予後リスク層別化することが示された。